

## ウサギの避妊・去勢 どうしてするの

ウサギは、学校のように多頭飼育をしていたり、家庭でも2匹以上飼っていてオスとメスが同居していれば、子孫を残す本能で交尾をして妊娠する可能性があります。

妊娠すると1カ月で4~10匹ほどの子どもを生みます。ウサギによっては、多ければ年に4~8回くらいの出産が可能なので、どんどん増えてしまうことになります。

数が増えると楽しさも増えますが、管理が行き届かなくなってしまうこともあります。その場合は、子ウサギが生まれないようにする必要があります。

また、1匹で飼っていて増える心配がなくても、病気の予防や問題行動の治療として、避妊・去勢をした方がよい場合があります。

オス特有の病気やメスであることで起こる病気を予防する以外に、マーキングといって尿をあちこちにスプレーしたり、人にかみついたり、マウンティングといって人の手足にしがみついてくる交尾行動の疑似行為を防ぎたいときなどです。

### 避妊・去勢をしていない場合の泌尿器・生殖器系疾患

発情が始まるのは、品種にもよりますが、メスでは4~5カ月齢前後で。オスでは5~8カ月齢です。交尾をすると、妊娠期間は30~32日です。

メスは避妊をしなかった場合、妊娠、出産に伴って起こる病気になることがあります。流産、難産、子宮破裂などです。

手術していないメスは、3歳くらいになると子宮の病気が非常に多くなります。子宮内膜炎、子宮内膜増殖症、子宮蓄膿症、子宮水腫、子宮腺がん、子宮内出血などです。陰部からおりものや出血があったり、お尻の毛が汚れていたり、いつもの部分をなめていることでわかることもあります。症状を出さないことも多いので気をつけないといけません。また、卵巣が腫れてホルモンの異常が起こる卵巣腫瘍、偽妊娠（想像妊娠）、乳腺腫瘍、腫大、腫瘍なども起こることがあります。

メスはまた、発情に伴って気が荒くなり、人にかみついたり向かってきたりうることがあります。

去勢をしていないオスでは、睾丸の腫瘍、睾丸炎、精巣上体炎、縄張り争いのケンカによる外傷などが起こることがあります。

また、先にも述べたように自分の存在を知らせるための尿マーキング（尿を家具や人にちょこちょこスプレーすること）をしたり、マウンティング（人の手足にしがみついて交尾に似た行為をする）をしたり、縄張りの主張でかみついたりすることがあります。

### 避妊・去勢の結果として起こり得る弊害

オス、メスとも攻撃的になるウサギの改善や縄張りの主張としての尿スプレーが無くなることを期待して避妊や去勢手術を行うわけですが、問題行動が完全には無くならないこ

ともなかにはあります。

異性への関心が薄くなるため、食べることだけが楽しみとなり、食べ過ぎている場合があります。このことの対策としては、牧草を多くしてペレット、果物などカロリーの高いものを減らすとよいでしょう。手術をしなくても太っているウサギは多いので、一番大切なことはエサの内容と与え方です。

手術の傷を気にしてかじったりなめたりして血腫ができたり、糸をかじって取ってしまったりすることがありますので、よく観察してあまり気にしているようなら、病院から外用薬をもらいましょう。これを防ぐために糸が見えないような特殊な縫い方をすることもあります。

ウサギは犬や猫に比べると、麻酔や手術に時間がかかり、危険性が少し高いと思われます。警戒心の強いウサギの場合は突然暴れたり、興奮したりすることがあり、手術台から飛び降りたりする可能性もあります。またストレスも多かれ少なかれ受けることになりま。術後の看護も万全の態勢にしておきましょう。

飼い主はウサギの避妊・去勢の是非についてどう考える

肥満のウサギでは、子宮のまわりに脂肪がたくさんついていますので、卵巣や子宮を取り出しにくくなります。おなかに脂肪がたくさんついていると横隔膜を圧迫しますので、麻酔中は特に呼吸を妨げることになります。脂肪が少ない若いとき（生後3～6カ月齢）に手術をした方がよいでしょう。肥満のウサギはすこし減量してから手術した方がよいでしょう。

犬や猫では気管に直接チューブを入れて、確実に麻酔ガスや酸素が通るようにできますが、ウサギは体の構造上、気管チューブを入れるのがかなり難しいので、多くはマスクで麻酔を維持することになります。鼻腔やのどで空気の通りの悪いウサギでは、麻酔の管理が難しくなります。

手術の有用性は高いものの、以上のような理由から、全く危険がないというわけではありません。

飼い主の手術に対する気持ちと、ウサギの性質や健康状態、獣医師の手術に対する考え方を考慮して、最終的な判断をすることになります。

手術は全身麻酔で行われますので、苦痛はほとんど感じないでしょう。

オスは普通、開腹はしないので、手術時間も短くてすみます。ペアで飼育している場合、パースコントロールのみが目的でどちらかを手術するのであれば、オスの方がよいでしょう。

捨てる前に 飼う前に

注文していたウサギの本が届きました。ウサギとってまっ先に名前が出てくる獣医師

は、齊藤久美子先生です。その齊藤先生が新たに翻訳した「ウサギの内科と外科マニュアル」です。

パラパラめくっていて、手が止まったページは、先月号にも書いた「捨てウサギ問題」でした。

イギリスとアメリカでは、捨てウサギが増えているそうです。家の中で望ましくない行動をとるウサギがいるからとの理由のようですが、どうもウサギ自身に問題があるのではなく、ウサギと暮らす人の方に問題があるらしいのです。

うちのウサギはモノをかじるから困るという場合、ウサギはかじるのが本性、それを止めさせるのではなく、代わりにかじってもよいものを与えるのです。うちのウサギのプーは、いたずら盛りりのころ、エレクトーンのコードをかじったっけ。いらなくなった手紙やペーパータオルの芯などがおすすめ。他にはかじられて困るところに、香水やシップ薬のようなハッカの匂いで寄せつけないようにすることだそうです。

人に攻撃をしかけてきて困る場合は、性ホルモンとの関連があるそうです。大人になったオスウサギは縄張り意識が強くなるため、自分のテリトリーに入ろうとする人を攻撃するのです。去勢や避妊の手術は、医学上のメリットも大きいのでおすすめします。それでもうちのプーは私にだけかんでくれますけど。他の動物を攻撃して困るという声もよく聞きますが、ウサギは他のペット、それがたとえどんなに大きな犬でも気の強い猫でも、自分の手下と見なすそうです。留守するときの放し飼いは要注意ですね。

トイレを覚えなくて、というときは、まず壁沿いの角にウサギがすっぽり入れる大きさのトイレを作ることです。そして対角線上の角に食器と水入れを置けば解決することがほとんどです。試してみる価値は大いにありますね。

初めてウサギを飼うとき、私もそうでしたが、ウサギはぬいぐるみのようにおとなしいと思っていました。こんなに気が強くて神経質とはつゆ知らず、「プーはなんて悪い子なんだろう！ 育て方に問題があったかしら」ともんもんとしたものです。つまりウサギの正常な行動を理解しきっていないこと、

その性質と折り合っていく工夫をしていないことが根っこにあるということです。

ウサギって本当はこういう性質だと理解すれば、それなりに上手にしつけることで、お互いにハッピーな関係になり、絆もできるのです。捨てる前に、いいえ本当は飼う前に、ウサギの秘密を知っておきたいものですね。